

やどなし犬

鈴木三重吉

青空文庫

むかし、アメリカの或ある小さな町に、人のいい、はたらきものの肉屋がいました。冬の半の或なかば寒い朝のことでした。外は、ひどい風が雨を横なぐりにふきつけて、びゅうびゅうあれつづけています。人々は、こうもりのえにかたくつかまりながら、ころがるよくなかつこうをして、つとめの場所へ出ていきます。肉屋は、店のわかいものたちと一しよに、かじかんだ手で、肉にくぎり切ぼうちようをといでいました。

すると、店のまえのたたきのところへ、一ぴきのやせた犬がび

しよぬれになって、のそりのそりとやって来ました。そして、はげしいしぶきの中に、のこりとすわって、店先に下さがっている肉のかたまりを、じろじろ見上げていました。どこかのやどなし犬でしょう。肉屋もこれまで見たこともないきたならしい犬でした。骨ぐみは小さくもありませんが、どうしたのか、ひどくやせほそって、下腹したばらの皮もだらりとしなび下さがっています。寒いのと、おそらくひもじいのと両方で、からだをぶるぶるふるわせ、下あごをがたがたさせながら、引きつれたような、ぐったりした顔をして、じろじろと、かぎにかかった肉を見つめています。

肉屋は、おどけた目つきをして、ちよいちよいそのやせ犬を見やりながら、ほうちようをこすっていました。犬は肉屋の注意を

引くように、ときどきくんくん鼻をならしてはこつちを見ます。そのうちに肉屋はほうちようをとぎおえて、刃先をはさきためすために、そばの大きな肉のはしの、ざらざらになったところを、少しばかり切り落しました。そして、

「ほら。」と言つて、やせ犬になげてやりました。すると犬は、それが地じびたへおちないうちに、ぴよいと上手に口へうけて、ぱくりと一口にのみこんでしまいました。肉屋はおもしろはんぶん、こんどは少し大きく切りとつて、ぽいとたかくなげて見ました。犬はさつと後あと足あしで立ち上つて、それをも上手にうけとり、がつがつと二どばかりかんでのみこみました。

「へえ、こいつはまるでかるわぎ師だ。どうだい、牛一ぴきのこ

らずくうまでかるわぎをやるつもりかい？ ほら、来た。よ、もう一つ。ほうら。よ、ほら。」と、肉屋はあとからくくと何となく切ってはなげました。犬は、そのたんびに、ぴよいぴよいと上手にとつて、ぱくぱく食べてしまいます。

「おまいは、おれの店の肉をみんなくつていく気だな？ さあ、もうこれでおしまいだ。そのかわり少々かたいぞ。」と、肉屋は最後に、出来るだけわるいところをどつきり切つてなげつけました。しかし、犬はもうそのしまいの一きれだけは食べようともしず、しばらくそれをじろじろ見つめています。

「何だ。^{なん}何を考えてるんだい。」と肉屋は思いました。そのうちに、犬はふと、その肉をくわえるなり、^{まちかど}どんどん、町角の方へ

かけさつてしまいました。

そのあくる日は、からりと晴れたいいお天気でした。きのうの雨できれいにあらわれた往来にはもくもくと黄色い日かげがさしています。人々はあいかわらず急ぎ足で仕事に出ていきます。肉屋は、きようは極上等ごくじょうとうの肉をどつきりつるして、お客をまっています。すると、そこへ、きのうの犬がまたのこりと出て来て、同じように、たたきの上にすわったまま、じろじろと肉のきれを見上げています。

「ほう、また来たな。」と肉屋は言いました。

「来い来い。はいつて来い。」と、チュツチュツと舌をならしますと、犬はこわごわ店の中へはいつて来ました。

「ほら、ここまで来い。どら。」と肉屋はごごんで、かるく犬の
のどの下をもち上げながら、

「へえ、かわいい目つきをしてるね、おまいは。毛けなみ並もよくちぢ
れていて上等だ。ちよつと齒を見せろ。齒なみもなかなかりっぱ
だ。おまいはおれの店の番人になるか。え？ 今いまんとこはまった
くやせ犬の見本みたいだが、二週間もたてばむくむくこえていい
犬になる。おい、おれんとこにもいい犬がいたんだよ。そいつが
にげ出して殺されたんだ。おまいは、かわりに、おれんとこの子
になるか。なる？ おお、よしよし。」

肉屋が右手でくびのところをだくようにしますと、犬は、言わ
れたことがわかったように、肉屋の左手の甲をぺろぺろなめまし

た。犬はそのまま夕方まで肉屋の店先で番をしました。あたりの犬たちが出て来て、店の中へもぐりこもうとでもしますと、やせ犬はうゝうときばをむいておいまくり、うろんくさい乞食こじきが店先に立つと、わんわんほえておいのけてしまいます。それはなかなか気がきいたものです。とおりに何かへんな物音がすると、すぐにとんでいって、じいっと見きわめをつけ何でもないとわかればのそのそかえって、店先にすわっているという調子です。

日がいると、肉屋はくちぶえをならしてよび入れました。そして、やさしく背中をたたいたあとで、大きな肉のきれをなげやりそとしました。ところが犬はそれをたべないで、口にくわえて外へ出てしまいました。そして、どんどん走って、きのうのとおりに、

町かどの向うへかき消えてしまいました。

「何だ。」と肉屋は、すつぽかされたような気がしました。しかし、あんなにおれになついで、いちんちじゆう一日中番をしていたくらいだから、夜になつたらまたかえつて来るかも知れないと思ひながら、それとはなしにまっていますでしたが、夜おそくなつても、犬はそれなりとうとうかえつて来ませんでした。

「やつぱりのら犬はのら犬だ。一ぺんでいっちまやがった。」と、肉屋は寝がけに一人ごとを言いました。

ところが、あくる朝、店のものが戸をあけますと、犬は、もうとくから外へ来てまちうけていたように、ついで店へはいつて、うれしそうに尾をふつて肉屋のひざにとびつきました。

「よし／＼／＼。分ったよ／＼。」と肉屋は犬の両前足をにぎつて、外のたたきの方へつれていきました。犬はそれからまた一日中、店先において、一生けんめいに番をしました。肉屋は夕方になると頭をなでて、きのうのとおり、大きな肉のきれをやりました。ところが犬は、やはりそれを食べないで、口にくわえたまま、またどこかへいってしまいました。そしてあくる朝はまたちゃんと出て来て、店の番をしました。

とうとう一週間たちましたが、犬は毎日同じように、もらった肉を食べないでもっていきます。肉屋は、一たいああして肉をくわえてどこへもっていくのだろう、一日中おれのところにおりながら、どうして夜はきまって、ほかのところでは寝るのだろうか、

店のものたちと話し合いました。

「おいおい、きょうもまた食わないでもってつたよ。一つあとをつけてって見よう。来な。」と、肉屋は或^{ある}日店のもの一人をつれて、ついていきました。夕方は人どおりも少ないために、肉屋と店のものとは、犬のすがたを見失うこともなく、歩いたり走ったりして、どんどんついていきました。

「何だ。どこまでいくんだらう。え、おい。ずいぶん遠くまで来たじゃないか。」

犬はまだどんどんいつて、とうとう町のはずれまで来てしまいました。そこには、ばらばらに小さい家が建ちぐさつたりしている、どすぐろい、ひろい砂地がありました。そのあたりは、冬は

風がはげしくて、砂がじやりじやり家々の窓や、とおる人の顔へふきとんで来ます。

「おお、ひどい砂だ。」と言いなながら、肉屋は犬のあとから、そここのところをななめにつつきつてかけていきました。犬は肉屋たちがおっかけて来ていることには気がつかないらしいのです。そしてそこいらの或小家こいえのところまで来ますと、さもかえるところまでかえったというように、その家のうしろの方へのそのそはいつていきました。

肉屋たち二人は、そつといつてのぞいて見ました。家のうしろは、ちよつとした空地あきちで、まん中に何かをたてようとした足場らしいものが、くずれかけたまま、ほうりっぱなされており、ぐる

り一面にはごみくずや、いろんなきたならしいものが、ごたごたすててあります。犬はその空地の片すみにころがっている、底も天井もぬけた、古ぼけた穀物だるの口もとにすわりこみました。たるの中には、かんなくずや砂なぞがくしゃくしゃにはいつています。そのかんなくずの上に、何だか^{なん}しゆるであんだ、ぼろぼろの靴ぬぐいをまるめ上げたような、そういう色とかつこうをしたものがころがっています。犬は、そのへんなもののまえに、くわえて来た肉のきれをおいて、くんくんなきつづけました。しかしそのへんなものが動き出しもしないので、犬はたまりかねたように、前足をあげて、おい、おきろ〜と言わないばかりにつつきました。

すると靴ぬぐいのようなものは、むくむくと半たち上つて、よろよろと肉のきれのそばへ来て、たおれるように腹ばいしました。

栗色をした、よぼよぼの犬です。病気でひどくよわっていると見えて、やせ犬のくれた肉のきれをももうそうに二、三どなめまわしましたが、それを食べる力もないように、そのままぐんなりと顔を下げてしまいました。こちらの犬は、

「さ、早くお上りよ。よ。よ。」と言うように、くんくん言っていました。それでもまだ食べようとしないので、相手の食慾をそろそろとするように、その肉のきれのかどを、小さく食い切つて、ぺちやぺちやと食べて見せました。それでも病犬は、じつとしたまま動きません。こちらの犬は、しかたなしに、こんどは肉

のきれを、二、三尺うしろの方へ引きずって来て、それを前足の間にあいだにおいてすわり、さも病犬をさそい出そうとするように、口の方で肉をつつきくしては、じつとまっています。

「さ、来て食べてごらん。おいしいよ。ね、ほら。うまそうだろう。食べない？ きみが食べなけりや、わたしがみんな食べるよ。いいかい。食べてもいいかい。」と言わぬばかりに、しきりにくんくんないたりしました。しかし、いくら手をかえてすすめてもだめでした。病犬はちゆうとで一ど、よろよろと出て来て、肉のはしをちよつとかんで見ましたが、またのそのそとかんなくずの中へかえつてうずくまり、目をつぶつてうとうとと眠りかけました。

こちらの犬は、肉のきれをくわえていって、その犬の口のところへおき、じぶんも中にはいって砂だらけのくわなくずを、かきまわしたり、ならしたりして、病犬のそばへ一しよに寝ころびました。肉屋たちは、じつとすべてを見ていました。

「おい、もうかえろう。暗くなつた。ほんとに感心なものだね。われわれ人間の中にも、あれほど情ぶかい、いきとどいたやつはちよつといないぜ。毎日朝からおれんところではたらいて、夕方になると肉をもつて来てあの犬に食わしてるんだ。見上げたものじゃないか。」と肉屋は、しみじみこう言いました。

「まつたくです。だが、だんな、あの犬は、ものが食べたいよりも、のどがかわいてるのじゃないでしょうか。水がのみたくても、

あれじゃさがしに歩けないでしょうから。」と店のものが言いま
した。

「ふん、なアるほど。そいつアよく言った。どこかに水は目めつか
らないかな。あ、その、へんなちっぽけな家には、だれか住ん
でるよ。」と肉屋は、空地あきちの向うの家の戸口うちへいつて、

「もしもしちよつと。どなたかいらつしやいませんか。」と言つ
て、戸をたたきました。すると、中から、うすぎたない女が戸を
あけました。肉屋は今の病犬のことを話して、かわいそうですか
ら水をのましてやりたいのですが、と言いますと、女は、小さな
あきかんへ水を入れてもつて来てくれました。肉屋がそれを病犬
の口もとへおきますと、犬はすぐにくびをのばして、ぺちやぺち

やと、一気に半分ばかりのみほしました。そして、さもうれしうに、くびをふりふりしました。もう一つの犬も口をつけてぴちやぴちやのみました。病犬は水を飲んだために、少しは元気がついたように見えました。肉屋は、骨と皮とばかりの、そのからだをなでてやり、

「じゃア、よくおやすみ。あすまた見に来てやるからな。おおゝ、かわいそうに。——おまいもあしたまたおいで。」と、もう一つの犬をもなでていきました。

あくる朝、肉屋がいつもの時間に店をあけますと、犬はもうちやんと来てまつていて、くんくん言いながら尾をふります。肉屋は町中じゆうの人々や、買い物ものに来たお客たちに一々その犬の話をして聞かせました。すると、だれもかれも、

「へえ。」と感心して、犬を見入ったり、くびをなでたりしていきます。犬はやはり夕方まで店の番をつづけました。肉屋はきょうは肉の分量を少しおおくしてやりました。犬はあいかわらずそれをくわえてかえっていきました。肉屋はそのあとから、水さしに水を入れて、それをもつてついていきました。

「どら、おれもいつて見よう。」と、話を聞いた、となりの人も一しよに出かけました。

それからいく週間もたちました。感心な犬の話は、そこからかしこへとつたわって、町中で大評判になり、わざわざ肉を買いがてら見に来る人もあつたりして、肉屋ははんじょうしました。

そのうちに夏が来ました。或朝のことです、これまではいつもひとりで来つづけていた犬は、その日は、ほかの一ぴきの犬と二人で店先へ来ていました。犬は、つれの犬を肉屋にひきあわすように、くんくん言い言い尾をふりました。片方は、やせ骨ばって、よろよろしています。それが、こわごわ肉屋の足もとへ来て、顔を見上げました。れいの病犬が歩けるようになって、一しよに来たのです。肉屋は、

「おお、よく来たね。」と、病犬をなでて、上等の肉を切つてな

げてやりますと、すぐにながつがつ食べました。先せんからの犬はそれを見て、さも満足したように尾をふりました。それから毎朝ふたりで出て来ました。ふたりとも店の中へは、めつたにはいらな
いで、しき石の上にすわっていたり、そこいらを歩いて来たりし
ます。ふたりがけんかなぞをしたことは、ただのいどもありません。
ん。夕方になると、いつも肉のきれをもらつて食べて、ふたりで
町はずれの寝場所へかえつていきます。町のら犬たちも、この
ふたりが肉屋のまえにいるのを、もうあたりまえのように思つて、
けつしてあらそいもせず、さつさとおつていきます。たまに、
はじめてまよいこんで来た犬などが、肉屋の店先にでも近よりま
すと、ふたりの犬はうんうんおこつて、すぐのみぞの中へおとし

こんだりします。そのころでは、もはや、町中全部の人が、そのふたりの犬のことを話にのぼしました。

そのうちに、町には急に或大工場が出来て、何千人という職工たちが移住して来ました。そのために、町の外へは、そとどんどん家がたちつまりました。こうして町が大きくなるにつれて、方々からいろいろの人がどつきり入りこんで来ます。その中には、ふろう浮浪人にんもかなりたくさんいて、いろいろわるいことばかりするので、警察も急にいろいろのやかましい法令をつくり、ついで衛生上のことにもあれこれと手をつくし出した結果、きょうすいびょう恐水病をふせぐために、町中に、のら犬を歩かせないことにきめてしまいました。その手段として、警察では、ほろのついた、大きな野犬やけん

運ばん用のぐるまのはこ車をつくり、それを馬にひかせて、飼主のわかない犬を見つけると、片はしからつかまえてつんでいき、きまつたぼくさつじょう撲殺場へもつてつて殺しました。

ほろ馬車のはこは、鉄のこうしがはまって、中に入れられた犬が見えるようにしてあります。ふとしてくび輪をつけわすれたりしていたために、野犬としてつかまえていかれた場合には、警察へいって罰金をおさめると、はこから出してわたししてくれるのでした。町の人たちの中には、このとりしまり法のために、たとえば野犬でも、いつも来なれていた犬がどんどんひつくくられていくので、恐水病のおそれよりもまえに、じつにひどいことをすると、警察へ悪感情をいただくものがずいぶんいました。

或日、そのほろ馬車の一つが、びつこの馬へびしびしむちを入
れながら、でこぼこのしき石の上をがたがたと、肉屋のとおりへ
はいつて来ました。

「やあ、来た来た、犬殺しの馬車が来た。」と、向いの人が往来
でどなりました。肉屋は、

「どら。」と言って出て見ました。馬車のうしろには巡査が乗っ
て、野犬はいないかと目を光らせています。

「だんな、うちの犬が二ひきとも見えないがだいじょうぶでしょ
うか。」と店のものが言いました。

「何^なあ^あに」 あいつは二ひきともきびんだからだいじょうぶだよ。」と
言っているうちに、馬車は、十四、五間^{けん}手前で、ぱたりととまり

ました。

「おや。」と思つて見ていますと、巡査は、先に針^{はり}金の輪のついた、へんな棒きれをもつたまま、馬車を下りて、その横丁へはいつていきました。と、一分間もたたないうちに、巡査は、犬を一ぴきつかまえて引きずつて来ました。犬はきやんきやんなきなきていこうしましたが、くびに綱を引つかけられて、ぐんぐん引っぱられるのですからかないません。馬車使^{つかい}は、すばやく鉄ごうしの戸をあけました。犬はたちまちその中へなげ入れられ、綱をとかれてとじこめられてしまいました。

「あきれたね。」と言いながら、肉屋は馬車に近づきました。警官は馬車のうしろへ乗りました。馬車使はちよつとどび下^おりて馬

の頼ほわか革わをしめなおしています。肉屋がのぞいて見ますと、中には二十ぴきばかりの犬がごろごろしています。まさか、うちの犬はいないだろうな、と、よく見ようとするとたんに、「わうわう。」と、かなしそうなり声を上げた犬がいます。肉屋は、おやつとびつくりしました。うちの犬がかまっているのです。病犬もいます。二ひきともやられてしまったのです。馬車使は車しやだ台いへあがりました。

「おいおい、ちよつとまった。」と、肉屋はまっ青になって、馬のくつわを引ツつかみながら、巡査に向つて、

「もしもし、私わたしんとこの犬を二ひきとも出して下さい。何という乱暴なことをするんだ。」と喰くつてかかりました。

「どけよ。野犬なら仕方がないじゃないか。こら。」と言いながら、馬車使は、ぴしんとむちで肉屋をなぐり、馬にもぴしぴしむちをあてて、かけ出そうとしました。

「ちきしよう、人をぶちやアがったな。」と言いながら、肉屋は、すくと馬車使を引きずりおろしてつきはなし、馬の口をもつて、むりやりに店先の方へまわすはずみに、馬は足をすべらして、ばたんとたおれかけました。

「何だ何だ。」

「どうしたんだ。」と、町中のものや通行人たちがどやどやかけつけて来ました。

「こいつらがおれんとこのあの犬を、二ひきともひつくくりやア

がったんだ。下りろ、きさま。」と肉屋は巡査の足をつかまえて、むりやりに引きずり下おろしました。人々はみんな、あの二ひきの犬の同情者であるのは言うまでもありません。みんなは、

「なぐれなぐれ。」と言つて、巡査をとりかこみました。そのうちに、気の早い男が、大きな大おおおのをかかえて来て、がちやん／＼と馬車をこわしはじめました。巡査はみんなにつきとばされ、けりつけられて、よろよろしながら、そばの或店の中へにげこみました。その間あいだに、またある一人が鉄の棒をもつて来て、がちやんがちやんと馬車をたたきつけ、とうとうふたりで鉄ごうしをやぶつてしまいました。中の犬たちはおよろこびでとび出して、八方へにげていきました。肉屋の二ひきの犬は肉屋の足もとへと

んで来て、くんくん言つてよろこびました。

こんなさわぎがあつてから、二、三年の後のちです。ふたりは、やはり毎日一しよに出て来ましたが、そのうちに、もと病犬だった方は、だんだんに皮ひふのつやがなくなり、のちには、あばら骨がかぞえられるほどやせて来て、食べものもろくに食べなくなり、店先へ出て来ても、ただ一日じゆう、しき石の上にごろりとなつたきりで、ときには、何時間となく、こんこんと眠りつづけています。目も急にかすんで来たようです。肉屋はくびをかしげて考えました。

夕方になると、その犬は、もうひとりの犬について、よちよちと寝どころへかえつていきます。ところが或とき、犬は一ぴきだ

け来て、そのやせた犬は一日いちんちすがたを見せない日がありました。出て来た方は、夕方になると、もらった肉のきれを食べないでくわえてかえりました。

「ふふん、とうとうまた寝ついてしまったな。」と言ひ言ひ、肉屋は、あとからついていつて見ました。犬の寝場所は、もとのところは、家でもたちつまつておいたてられたと見えて、先せんとはちがつた場末ばすえの、きたない空地あきちにうつつていました。病犬は、そこにころがつている古材木ふるの下にこごまつて、苦しそうに腹でいきをしていました。

肉屋は、あくる日、大きなあきだるをもつて来て、わらをどつきり入れて、小屋がわりにおいてやりました。そのあくる日は、

どうしたものか、じょうぶな方の犬も出て来ません。肉屋はへんだとおもっていつて見ますと、じょうぶな方の犬はたるのまえにすわって、中にいる病犬の見はりをしていました。

「おい、どうしたい。」と、そのくびをなでたのち、

「これこれ、おれだよ。おきないか、おい。」と言つて、中の犬をよびました。しかし犬は、目もあけないで、ぐんなりしているので、肉屋はひきおこしてやろうと思つて、手をのばして、からだにさわりましたが、いきなり、あつと言つて手を引っこめました。犬は、もう死んでつめたくなっていたのです。

肉屋は、そこいらの片すみへ穴をほつて、おおく、かわいそうにく〜と言いいい、死がいをうめてやり、その上へ土をもり上

げました。もうひとつの犬は、かなしそうに、くんくんなきなきうろうろしていました。

その翌^{あく}る日、肉屋は、のこった犬をその空地^{あきち}へかえさないようにして、すべてをわすれさせてやろうと思つて、じぶんの家のうら手へきれいなわらをしいたはこをすえてやりました。しかし犬はどうしてもそこへ寝ないで、かえつていきます。ときには、もらった肉を、そのままくわえていくこともありました。へんだと思つて、そのつぎの日についていって見ますと、きのうもつてかえった肉は、そのままたるのまえにころがつていました。犬は、ときどきあの犬がなくなつてしまったのをわすれて、ものを食べさせようと思つてはもつてかえるものと見えます。店先へ来てい

る間も死んだ犬と同じ毛色の犬がとおりかかると、いそいでとび出^{あいだ}して、じろじろ見ていますが、間ちがったとわかると、さもがっかりしたように、しおしおとひきかえして来ます。

犬はその後、^{のち}だんだんにやせて元気がなくなつて来ました。出て来ても、これまでのように、店の番もせず、何かなくしたものをさがすように、そこいらをまわつて歩いたり、からになったよくな目つきをして、ものうそうに一つとところを見つめていたりします。毛色も目立って灰色になり、皮ふがたるんで、だんだんにあばら骨まで見えて来ました。肉屋は、そのすべてが、みんなあの犬をうしなつたかなしみから来ているのだと思うと、かわいそうでたまりませんでした。

その年の冬近くでした。犬はいよ／＼よぼ／＼におとろえてしまいました。或日、いちんちじゆう一日中ちつともすがたを見せないのので、肉屋は夕方、れいの空地へ出かけて見ますと、犬は、たるの中で死んでいました。

肉屋は、その死がいをいつまでもなでつづけていましたが、間もなく、うちへかえつて、シヤベルとズツクのきれとをもつて来ました。そして、せんの犬の塚つかのとなりへ穴をほり、死がいをていねいにズツクのきれでつつんで中へ入れ、ちやんと土をもり上げました。そしてシヤベルの土をおとしおとししていました。が、とうとうたまらなくなつて、おんおん泣き出しました。

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店
1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店
1975（昭和50）年

初出：「赤い鳥」

1924（大正13）年1月

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

やどなし犬

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>